

論文の内容の要旨

論文題目 周縁化と宗教変化の社会的経験
一北タイの伝統派およびキリスト教徒ラフ集団の事例一
氏名 西 本 陽 一

本論文は、タイの山地少数民族ラフの二集団を対象として、周縁化の経験および周縁化への宗教的な対応のあり方を比較検討するものである。

ラフが居住してきた大陸部東南アジア北部から中国西南端に広がる地域（「ラフ居住地域」）では、前近代から近代への移行の中で、地理環境に適応した山地と低地の住民の住み分け関係から、領域国家理念による支配と被支配へと関係への重心移動が見られた。近代化はラフの周縁化の過程であり、かつての自立性は剥奪され、低地勢力への従属が強まった。

キリスト教徒ラフの周縁化と宗教変化をめぐる経験は、語りの中に反映されている。「ラフ」について否定的に語るという独特の形式の語り（「自嘲の語り」）の中心モチーフは、低地多数民族に対する相対的褻奪である。一方でラフは自身をより肯定的にも描き、否定と肯定の相半ばする自己規定が、ラフの両義的な経験を構成している。

「自嘲の語り」のうち「知恵」に関する語りは、キリスト教徒において頻繁に聞かれる。ラフの伝承は、彼らの現在の苦難は原初における祖先の考えのなさや邪悪な低地民の迫害の結果だと語る。このような伝承はキリスト教が伝えられる以前から存在したが、長期にわたるキリスト教会の「文明化」政策により、文字／本による「知恵」の欠如という点から、キリスト教徒ラフの否定的な自己意識が再生産され増幅された。今日、キリスト教徒ラフの間では、（本や教育から得られる）「知識」は（長い人生経験から得られる）「知恵」と同一視され、主流の語りはラフ民族繁栄のために「知恵を求めよ」と繰り返す。一方、下

層の村人の舞台裏の語りは、本来のラフ的なものと彼らが考える、文字／本以外による「知恵」を強調し、主流の語りに対抗する。主流と舞台裏の語りの対抗によって、両義的な自己意識が再生産されている。

「ラフの国」と預言者の物語は、キリスト教徒ラフが定型化して語るテーマである。キリスト教徒ラフの物語は(1)原初の栄光とそれからの転落、(2)離散・流浪と苦難、(3)預言者の登場と預言の実現(聖書の到着)、(4)知恵を学ぶことと団結への呼びかけ、(5)未来の栄光と「ラフの国」の再興という筋で語られ、預言者の物語を軸として民族の運命は、転落と退行から漸次的な進歩として描かれる。長い歴史を経て、キリスト教徒ラフの間には預言者伝承が確立され、彼らの神話世界は大きな変容を経た。ユダヤのそれとパラレルな形に再構築されたラフの神話世界とそれが提示する新しい歴史観は、キリスト教徒ラフの経験を分節化し、より明確な形に作り上げた。

伝統派ラフの宗教においては、形而上学的な教義に対して、安寧や繁栄を求めるために行われる儀礼や実践が卓越している。伝統派ラフにおける超自然的な存在は、神と精霊に二分され、人間の側でもこの「神側」と「精霊側」それぞれに対処する宗教職能者たちが、それぞれに働きかける儀礼を行っている。伝統派ラフの宗教の特徴は、「神側」と「精霊側」からなる二元性である。

同時に、伝統派ラフの歴史では千年王国的な宗教運動が繰り返され、メシア的イデオロギーは、超民族的な組織化の契機となってきた。これらの運動は、伝統への回帰という主張にもかかわらず、実際には伝統派ラフの宗教に変化をもたらす宗教改革運動であった。伝統派ラフの宗教運動で見られるのは、実践における「精霊側」から「神側」への傾斜であり、神崇拜強調の言説の発達である。だが急激な至高神崇拜への傾斜の一方で、精霊祭祀は継続し、さらには運動の衰退局面では「精霊側」への再傾斜が見られる。伝統派ラフの宗教の歴史は、「神側」と「精霊側」の間の勢力の振り子運動を示してきた。

繰り返されてきた宗教復興・改革運動の一方で、より長期的に見れば、「森」(村外)での山の精霊に対する村落祭祀は、村内の神殿におけるグシャ崇拝によって代替されてきた。伝統派ラフの宗教の動態は、振り子運動的な重心移動だけでなく、精霊祭祀から至高神崇拜への漸次的な重心移動という点からも捉えられなければならない。

言説面においては、伝統派ラフはキリスト教徒ラフと異なる様相を呈している。キリスト教徒ラフの語りの形式性や饒舌さとは対照的に、過去について伝統派ラフは、「辛かった」等の拙く少ない語彙を用いて、断片的に、短く言及するだけである。

全体的に断片的で未発達な語りにおいて、伝統派ラフは「オヒ」／「オリ」(慣習、やり方)という語を用いて「ラフ」について頻繁に語る。千年王国的な宗教運動の主導者たちは、既存のラフの倫理宗教的な戒律を再強調しながら、様々な新しいやり方を導入する。彼らは、宗教的な説明言語を発達させ、より饒舌に語るが、その中で彼らが導入した新しいやり方は、昔の先祖の時代のラフの本当のやり方への回帰とされる。危機に陥った民族性を救いだす試みの中では、「ラフのやり方」が限られた数の語彙の繰り返しによって再強

調されてきたが、一方、急激な運動の陰であまり目立たないネ祭祀の実践者たちもまた、自らの実践を「昔からのやり方」だと主張する。宗教運動の主導者たちとネ祭祀者のいずれも、「先祖のやり方」という同じ語によって、それぞれの実践の流儀を正当化するのである。

内向的・復古的な外見にもかかわらず、「オリ」／「オヒ」の強調は同時に、伝統派ラフがその共同体の自立性をある程度保ちながら、低地のタイ政体と付き合っゆく途を開いている。宗教的な意味に関して「オリ」／「オヒ」は、言語化された内面的な教義ではなく、慣習的に行われる外面的な様式（「やり方」）である。伝統派ラフは宗教帰属の問題を、教義よりも実践の様式から判断するが、そのことによって、信仰の対象や内容の違いにかかわらず、伝統派ラフは自らを「点蠟者」（ラフ）であると同時に「仏教徒」（タイ）だと主張することができる。宗教に関して外面的な様式を重視する観点によって、伝統派ラフは、宗教的な独自性についての意識を損なうことなく、低地のタイ社会への親和性をもつことができるのである。

ラフの両集団の事例に見られるように、世界規模で進行する合理化と近代化および伝統社会と強大な外部社会との距離の縮小は、少数者集団の宗教のあり方に変化をもたらすこととなった。このような宗教変化の方向は、少数者集団が近代や外部社会からの圧力に対して反発・適応しようとする志向性に無関係ではない。

歴史的にラフの間で繰り返された千年王国運動は、強力な外部社会からの圧力の高まりに対する反応であり、外来の宗教の諸要素を取り入れながらも、発達した政治組織を欠いた少数者集団による宗教的な反発や抵抗という形を取った。運動の高まりにおいては、至高神崇拜の強調や言説化など、より「合理的宗教」への傾斜が見られたが、運動の鎮圧や沈静化は、より「伝統的宗教」への再傾斜として現われてきた。現在も伝統派ラフの間では、精霊祭祀と神崇拜の間の振り子運動が継続していると言える。一方、ラフの一部による世界宗教への改宗は、精霊祭祀と至高神崇拜との間の力学にひとつの区切りをつけ、より高い「合理的宗教」の性格を固定することとなった。宗教的な動態において、キリスト教徒ラフは、伝統派ラフとは別の方向性を得た。

キリスト教徒ラフの宗教における「合理性」には、至高神への崇拜対象の収斂、大規模で体系的な教会組織、呪術的な実践の否定の他に、言説の発達と精緻化が挙げられる。それは、聖書という書かれたものを基礎とした教義の合理化と体系化に留まるものではない。旧約聖書的な世界観によるキリスト教徒ラフの神話・歴史物語は、彼らの改宗前と改宗後の歴史を橋渡し、彼らが経験してきた苦難により分節化された意味を与えた。低地タイ人が主体となる仏教国タイにあって、キリスト教徒ラフは宗教的にも民族的にも低地との差異を明確化しながら、キリスト教会の提供する諸手段によって、近代社会によりよく適応する途を得ている。

「伝統的宗教」に留まる伝統派ラフの宗教は、千年王国的な宗教運動においてより「合理的宗教」へと重心移行するが、その変化は非可逆的なものではなく、より「伝統的宗教」

への逆移行が見られた。しかし、精霊祭祀と至高神崇拜の間の振り子運動の一方で、より「伝統的宗教」からより「合理的宗教」への長期的で暫時的な重心移動が進んできた。伝統派ラフの宗教は、近代化や外部からの圧力に対して抵抗と失敗のみを繰り返しているのではなく、近代的な論理により適合的な宗教形態へと変化してきたのである。

伝統派ラフにおいては、キリスト教徒ラフに見られるような宗教的な言語の体系化や精緻化は見られないが、「オリ」／「オヒ」に代表される断片的で朴訥な伝統派ラフの宗教的な言語は、非分節で曖昧さを残すものであるゆえに却って、彼らが低地集団から異なりながら親和性をもつものとして振舞うことを可能にしている。宗教的な言説の未発達さや非分節性は、少数者集団である彼らと強力な低地集団との権力関係自体を曖昧にする意味で、外部の近代社会に対応してゆくひとつの消極的な手段であるとさえ言える。

近代における周縁化に対して、ラフの両集団はそれぞれ違った宗教的な対応を示してきた。キリスト教徒ラフは、低地のタイ仏教徒と対照的な宗教形態への変化を経験しながら、近代社会によりよく対応できる合理性を身につけた。一方、伝統的な宗教に留まるように見える伝統派ラフは、低地のタイ仏教徒との差異を曖昧にするという一見消極的にみえる対応の中で、自らの独自性を維持している。